

## 都市(1)

報告では、共同研究「グローバル都市アジアと都市底辺層」をめぐる全体仮説を提示する。共同研究の問題意識は2つある。一つ、マニラ研究において、視座の転換、つまり、過剰都市化論からグローバル都市論への転換が迫られている。マニラの貧困層の中心は、農村の困窮者（マニラ移住一世）からマニラ生れの二世・三世へ移行している。マニラで貧困層が再生産されている。雇用構造において非正規雇用が増加し、労働階層の下降圧力が強まり、同時に階層分化が進んでいる。伝統的な底辺職種が膨張するだけでなく、新たな底辺職種が現れている。ジェントリフィケーションが進み、スクオッターが撤去され、居住者が再居住地へ移動し、またスクオッターが郊外化し、他方、都心部でホームレスが増加している。このような実態から、マニラ研究において、過剰都市化論に由来する農村貧困の都市移転論やインフォーマル・セクター論、スクオッター論の修正が迫られている。報告では、スクオッターの貧困者、都市先住民、ホームレスを包括し、過剰都市化論に則った「都市貧困者」(urban poor)と区別して「都市底辺層」(urban bottom)と呼ぶ。

二つ、マニラの下層社会が多層化している。マニラの貧困層の中心像は、これまで、スクオッターに居住する都市貧困者(urban poor)に求められてきた。しかし、都市底辺は流動化・多様化している。まず、スクオッターの階層構成が多様化している。スクオッターに中間層が増加している。スクオッターからビジネス地区へ通勤し、コールセンターや銀行で働く人がある。しかしその労働条件は厳しい。海外へ出稼ぎに出る人もいる。しかし成功者は少ない。他方で、多くの人々が親世代の貧困を脱出できず、スクオッターに滞留している。報告では、これらの変容する労働とその人々を「新労務(層)」、その帰結である貧困とその人々を「新貧困(層)」と呼ぶ。

次に、農村出稼ぎ者の流入が減少する一方、ムスリムやバジャウ、コルディレラ、アエタ等の先住民が増加している。社会の周縁者である先住民の都市移住は、フィリピン経済のグローバル化のもとで可能になっている。次に、ホームレス(非定住者)が増加している。新自由主義のもと、労働階層の全般的な落層が進み、都市底辺層やスクオッターの下層が、街頭へ押し出されている。また、資本の土地投資が進み、地価が高騰するなか、スクオッターの撤去が進んでいる。住民は、郊外のスクオッターや政府が提供する再居住地へ移動する。しかし、移転の当てのない人々が街頭へ押し出されている。こうしてマニラに、産業国都市と同様に、ホームレスが現れている(ホームレスのタイプは異なる)。

共同研究は、このようなマニラの都市底辺層の変容を念頭に、グローバル都市化しつつあるマニラの都市底辺層を対象とし、労働と空間(スクオッター)、移動と階層、およびジェンダーを切り口に、都市底辺層の変容とその意味について分析・考察する。報告は、その全体構図を提示する。